

私の戦後満州での思い出

福岡市東区

松永 利郎

昭和19年3月佐世保海兵団入団、海軍二等整備兵となり、元山海軍航空隊（現北朝鮮）に配属。初めて零戦（零式艦上戦闘機、後で特攻機になる）を見た。当時は主に予備学生、予科練習生等の練習航空隊で、毎日激しい飛行訓練の明け暮れで、寒い冬はエンジンがかかりにくいので苦勞した。

20年には元山からも特別攻撃隊七生隊として多数の犠牲者を出す。敗戦後は飛行訓練もなく、これで犠牲者も出さずに済むし、私達も日本に帰れると思った。だが実際はこれからが本当の苦勞が待っていた。ソ連軍の捕虜になり、8月下旬元山を出発。行き先はわからないまま連行され、元山の町を通る時、多数の日本人の人達が見送ってくれた。この町は私達にとっては懐かしい思い出の多い町でした。あの中には下宿（海軍は外泊があるので下宿がある）のおばさんや娘さんも当然来ているだろうし、出来れば一目会って別れたいが、（今は）捕虜の身で自由にならない。

夏の炎天下、ソ連兵のドバイ、ドバイで歩かされ、やっと川原で野宿する。元山を出てから何も食べていないので空腹と疲労で動けないが、夕食の準備にかかる。何とか米と川の水はあるが炊く薪がないので、大切な軍服を燃やして炊いた。次の日も同様、暑いなか川の水を飲んで歩き、今度は昨夜と反対、山の上で薪はあるが水がない。結局米をいって食べて寝た。空には星が無数に輝き綺麗だが、これからの事を思うと不安でした。ただし、昼間の疲れですぐ寝てしまう。

日本人の食事は米、水、火の三つが無いと食事は出さない。ソ連兵は硬い食パン1本あれば1日中困らないようで、日本人は何と厄介な品物を食べる人種かこの時ばかりは痛感した。3日目にやっと着いた所は興南の収容所で、この港から多数の兵隊が酷寒のシベリアに連行され、寒さと重労働で多くの死亡者が出る。元山からも大部分の人が行った。私は幸か不幸か満州（現在、中国東北地方）の吉林省延吉収容所に行くこととなり、雪の中、冷たい貨車で満足な食事も与えられず、1ヶ月以上かかって着く。この間寒さと栄養失調で多くの人が死亡した。この収容所は病院があると聞いていたが、薬も設備も無い所でした。ここでの仕事は炊事用の薪取りと1週間に一度位の食糧の受け取りです。

収容所の周囲は鉄条網が張られ、外側には日本人の避難民が多く、特に女性の人は頭の毛を刈って丸坊主になり、男の服装をして水をもらいに来ていた。私達が井戸水を汲んでやるところをソ連兵に見つかりと銃をかまえて非常に怒った。あの人達も本当に苦勞しただろうし、無事日本に帰れるよう祈るのみです。

21年春、まだ地面が凍っている頃、あちこちにある墓地を小高い丘の一ヶ所に埋葬し、慰霊碑を建てるとかで、ソ連兵に護衛されながら雪の降る中死体を掘り出し運搬した。

21年4月ソ連軍は撤退し、警備は八路軍（現中国共産党）に変わり、私は収容所を出たので慰霊碑ができたかどうか分からない。

次に行った所は、吉林省揮春県で八路軍の軍工場で日本人、中国人、朝鮮人と三ヶ国の者が働いていた。

その頃中国では内戦が始まり、我々の工場も移動することになり、ハルピンの駅を更に北上し、黒龍江省北安県とってソ連領近くに移った。こんな遠い所に来ては当然日本に帰れないと思う。この北安は周辺に山は全然なく、朝太陽は地平線から出て、夕方真っ赤な太陽がまた地平線に沈む時は、淋しい気持ちで思わず涙が出た。北安の冬は特に寒く、休日町に出る時など防寒服、防寒帽、手袋をしていても、寒いというより痛い感じで氷点下30度かそれ以上あったかもしれない。

ここで一つ忘れられないのが、工場入口に何の木か忘れてたが高い木があって、冬になると枝の周囲が全部凍って樹氷ができる。その樹氷に朝日が当って反射する光景は実に見事で、水晶かダイヤモンドのようで出勤する私達にとって心の安らぎでした。

25年には内戦の終結と同時に工場も引き払い、チチハルに行く。ちょうど夏頃でスイカや味うり等が豊富でした。私達日本人も今度は帰国できると思っていたが、またもや夢は打ち砕かれ、汽車で奉天（現瀋陽）で乗り替え、南芬と言う山あいの小さな駅に着く。この南芬には鉄山と選砒場（石を砕く所）があったが、内戦で破壊され、その修復が目的です。ここで嬉しい事は日本に初めて手紙が出せたことで、26年秋頃です。私が無事生きていることを初めて親兄弟が知り、非常に喜んだそうです。ただ1万円の切手をはっているのので、驚き、元気なことがわかったから高い手紙は出すなど言って来た。当時、煙草1箱5000円位していた。その頃朝鮮でも南北の争いがあったいて、下の所に行く鉄道では軍事物資が運ばれているらしく、特にソ連製トラックは幌をしてないのでよく見えた。

28年初め、選砒場の修復もやっと終わり、一応総ての機械が運転できた。戦前の部品に比べると耐久力は劣るが、機械は動いているし、本溪湖の溶鋳炉も1基運転開始したそうです。

やっと日本人も帰国することになり、本溪湖に集結する。ここには総合病院があって、医者、戦前日赤の看護婦さん達と帰国準備する。奉天（現瀋陽）を經由し引揚船が着く4月、天津に行く。第1次興安丸から始まり、私が乗った第8次高砂丸が最後でした。船内から九州の山々が見えた時は非常に感激し、これで間違いなく日本に帰っていることを確信する。あの時私の母は特に高齢だし、母親が元気なうちに帰り安心させたことが何よりも親孝行だったと思います。

最後にあの満州で多くの人達が犠牲になられ、今だに消息不明の人が多と思う。どうか皆様のご冥福を祈ります。